

各委員からのご意見について

委員	ご意見	備考
A	<ul style="list-style-type: none"> 高齢者移住を促進する日本版 CCRC を基本とし、玉野市は若い世代の移住も促進し、玉野市の人口減に少しでも歯止めがかかるように、玉野市の将来に向けての計画が「たまの版 CCRsea」である。現在、玉野市の住民には、今後益々高齢社会となり医療費が増加しその対応も必要である。厚生労働省は高齢社会到来の 2025 年問題として地域包括ケアシステムを構築し、本人、その家族を主体として医療・介護、行政（保健、福祉）住民の連携の重要性をあげている。当に地域包括ケアシステムは、たまの版 CCRsea 構想である。 当然、高齢者だけでなく若い世代の方々も病気になるため、救急対応が必要な場合もある。安心・安全な社会の基盤は世代に関係なく玉野市市民の一人一人の自覚とともに、病気に対しては、かかりつけ医の充実は勿論のこと、急変時の救急対応ならびに生活習慣病等の疾病の予防（栄養士による栄養指導等）においても中核となる病院が玉野市には必要である。 若い世代の移住には、風光明媚な玉野市の知名度を上げるために住んでいるとその良さが見えなくなる住民より、JTB によるメディアを介しての観光誘発活動ならびに雇用・地域資源の開発も必要。ヘルスツーリズムも活発的である。玉野の地形・食材を生かした健康増進は重要。ヘルスツーリズムでは、他県からの募集も玉野市の認知度を上げるためには大切だが、玉野市住民にもヘルスツーリズムを健康増進・生活習慣病予防（栄養指導）・フレイル予防として取り入れてはどうか。 若者が移住し生活しながら生涯に亘り活躍でき、さらに高齢者も人生の最終段階まで生活できる玉野市の計画に期待する。その一步として宇野駅・瀬戸内の玄関口であり、玉野総合医療専門学校のある宇野駅周辺に健康増進・疾病予防のために集約型施設として基幹病院の存在が大変重要な位置付けになると考える。 最後に、玉野市の老若男女全ての方々の生涯における住まいとすまい方には地域完結型を目指す地域包括ケアシステムのように多職種連携が大切。医療・介護・行政（保健・福祉）・観光・そして地域の人々が地域をみる人々と連携しあいながら、玉野市のまちに住居・病院・交流施設・宿泊施設が合体するような施設も提案する。川崎市川崎区日進町の例の様に。 	
B	<p>①健康マイレージ事業について</p> <ul style="list-style-type: none"> 他の自治体を実施している同様の事業では、地域の活動やボランティア活動をポイントの対象に含めている事例が見受けられる。地域活動やボランティア活動もポイントの対象に含めることでマイレージ事業への参加者の増加や地域の活動やボランティア活動への参加促進が期待できる。また、現在のインセンティブは抽選となっているが、豪華でなくても参加者全員に還元される方が事業への参加意欲が生まれるように感じる。 <p>②観光交流施設について</p> <ul style="list-style-type: none"> 他の自治体（茅ヶ崎市「ハマミーナ」）で公共施設の中に地域住民の活動拠点を設けている事例がある。観光交流施設に地域住民の活動拠点を設けることで、地域住民と観光客や移住者との交流が生まれる。また、地域住民による生活支援サービスの円滑な開設や運営が期待できるとともに、移住者の生活支援サービスの担い手としての参加促進も期待できる。 <p>③ホームステイ型民泊について</p> <ul style="list-style-type: none"> ゲストハウス等の宿泊施設を増やすと同時に、ホームステイ型民泊の受け皿を増やすことで、宿泊を通じた地域住民と観光客との交流の機会が生まれ、移住者の獲得人にもつながる可能性を感じる。また、家主は収入を得られる他、子どもが自立した後の夫婦のみ世帯であれば暮らしにハリが出たり、子どもがいる世帯が外国人を受け入れることで国際的な視野が形成されるなどの効果も期待できる。 	
C	<ul style="list-style-type: none"> 視点を玉野だけでは無く、広域（児島、灘崎）との連携を検討してはどうか。広い視野で、お互いに持っている良いところを生かすことで、相乗効果を得られないか。 交流人口が増え、雇用が増えれば、移住者が増えるという考え方は間違えではないかもしれないが、危うさを感じる。港フェスティバルでは相当の交流人口があったはず。仕事はあっても、他地域に住む人は住むだろう。たとえば、市役所職員のうち 3 人に 1 人の 219 人が市外から通っているように。その半数の方が、玉野に入られれば目的が達成される。そのような人たちも、わざわざ玉野に住む理由を作るための魅力的な具体策が必要。どんな人を移住者として受け入れたいのか、ゾーンの設定が広く移住者像がぼやけて見える。きちんとターゲットを明確にするべきではないか。そこに焦点をあてて、施策や体制を整えるべきと考える。 また、流出の理由として、宇野みなと線沿線の土地価格では、宇野の土地価格が、妹尾や早島、茶屋町と変わらない価格も、高い金額であることも要因としてあるのではないだろうか。玉野に住んで、市外就労もあり得ると思う。 前回も出ていたが、PR は大切だという事だったが、市役所も含めホームページが分かりにくい。IJU コンシェルジュの名前はたくさん出るが、活動内容もわかりづらい。知ってる人は知っているような状態。どこかに書いてあるのだろうか。人の顔が見えるようなページにしてはどうだろうか。和気町のホームページはわかりやすいし移住専用のホームページがある。 移住者の住居に関しては、空き家、空き店舗を利用するという事だったが、立地や程度の良い物件が確保できるのか気にかかる。 	

D	<ul style="list-style-type: none"> • 起点である宇野・築港地区については、<u>宇野港に面している魚市場の活性化が不可欠である</u>と考える。(将来的には、サンフランシスコの名物スポット フィッシャーマンズ・ワーフのような、賑わいを醸し出す場所にすべく、早急に計画づくりを実施すべき。) • 自然資源について、渋川海岸で砂浜を活用した体育教室など、観光協会では、年間を通じて海や砂浜を楽しんでいただく取り組み(渚の交番事業)をしているが、地味ながらも、少しずつファンを増やしていけそうな感触を持っている。王子が岳山頂の喫茶店「ベルク」は、1月に約1,000人もの観光客を迎えており、隠れた人気スポットとして、タウン情報誌で紹介されている。このような動きを市としても支援していただきたい。 • 宇野港からクルーズ船に乗船できる仕組みづくりを、市としても力を注ぐべきだと考える。 • 特産品については、紫いも応援隊を組織し、機能させるための準備をしている。<u>地産地消を、市としてもさらに応援することで、観光振興、産業振興につながり、CCRseaの推進に役立つことと思う。</u> • 市民参加については、観光協会と強く連携している観光ボランティアガイドつつじの会は、観光振興に大変意欲的に取り組んでいる。<u>玉野観光に、障害を持つ方たちを積極的に誘致し、交流することは大変有意義である。</u> • ヘルスケアサービス開発機能について、玉野には二つの温泉がある。<u>温泉と玉野の観光地を連携させ、玉野の温泉をたくさんの観光客に楽しんでいただく観光ルートづくりなどの仕組みづくりが大切である。</u>(渋川海岸で砂浜ヨガなどをして、マリンホテルの温泉を楽しむ。たまの湯で温泉を楽しみ、クルージングをする等。) • 移住支援機能については、<u>移住者と市民の交流の場や、交流の機会(パーティー等)をもっとやる必要がある。</u>玉野市民はあまり社交的とは言えないので、行政が民間に働きかけて、場づくりを進めるべきと考える。 • <u>「たまのオリジナル」が、今一つ分りにくい。</u>お宝たまの、の特産品があるが、それとの連携、再編等、どのように考えているのか。 • ものづくりとは言え、<u>造船の関係から派生したもののづくりがあるか。</u> 	
E	<ul style="list-style-type: none"> • それぞれの事業に対して、<u>すでにあるコンテンツ(他団体・活動)を綿密に把握し、連携を図れば</u>と思う。 • 市民・他団体活動との情報共有のしくみづくり。 • 市民が身近に気軽に参加できるしくみづくり。 • 健康に対して身体的なアプローチが中心だが、<u>精神的な要素(歴史・伝統・文化・芸術・コミュニティなど)も同じくらい重要に捉えられたら</u>と思う。 	
F	<ul style="list-style-type: none"> • 旅行でなく合宿でもない～テーマのある旅の提供～が必要。<u>「衣食住」に沿った単発旅が玉野の起爆剤となり、移住・経済活性のきっかけづくりに繋がる。</u> • 「衣」…トンボ製、染色人監修のスポーツウェア・手ぬぐい支給又は制作 • 「食」…健康食+地元飲食店割引チケット配布 • 「住」…海に見える空き家一軒貸し(より移住を意識) 等 • <u>一期一会で終わらせない工夫が必要。</u> • 回数券又は回数割引、マイレージ制、年間パス • 福祉系大学へ営業(ゼミ合宿、卒論制作なら割引)⇒ヘルスツーリズム学科ができる!? • 県外学生生協へ営業 等 	
G	<ul style="list-style-type: none"> • 高齢移住者が終末をどの様に迎えられるのか、イメージがわからない。医療・介護分野が高齢移住者に対してどのようなケアを実践するのか、よくわからない。日本版CCRCの考え方を基本にするのであれば、<u>移住高齢者の終末期をしっかりと支えることができる基本計画にすべきではないか。</u> • 市民病院の再生計画をどの様にするのか。地域包括ケアやヘルスツーリズム等のCCRseaにリンクする重要事項であり、<u>市民病院とCCRseaがどの様にリンクしていくのか</u>を含めて掲載するべきではないか。 • 市全域に段階的に効果を拡大させていく、とあるが、<u>具体的な実施方法や実施時期が決まっているのか。</u> • CCRseaの成功には、医療と介護とのネットワークが重要であり、そこに福祉をあわせた地域づくりの核が重要になるものとする。住宅の高齢者や高齢移住者がどの様に地域で生活していくのか、効果の拡大を期待する。 • CCRseaの拠点形成とは、サ高住や有料老人ホームのようなこれ医者を受け入れる施設ではなく、健康サービス・交流サービス・情報発信の拠点のことか。<u>移住高齢者を空き家で受け入れる場合、移住高齢者が市内各所に点在することとなり、十分なケアができないのではないか。</u> 	
H	<ul style="list-style-type: none"> • <u>玉野という街を注目して知ってもらうためにもSNSなどに写真を送って興味を持ってもらうことが必要。</u>例えば、港のチヌと船、王子ヶ岳の青い空とパラグライダーとか。巨大な岩をUPするのも面白いかもしれない。人が集まってくるような、玉野にしかない魅力を見つけてもらいたい。 	